

今年、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録されました。私はこの際に見学したいと願って、夫を誘ってキリシタン関連のツアーに申し込みをしたのですが…そんな私に夫が読んでみてはと勧めたのが、**広野真嗣著<消された信仰>**（表紙絵・下）でした。



洗礼者ヨハネ 土肥栄氏 所蔵

著者は関連遺産として登録されたキリシタンから、生月島のキリシタン遺跡が除外されていることに疑問を感じ、聞き取りや現地調査をし、その記録を出版されたのです。私もユネスコの世界遺産となった時に、隠れキリシタン、潜伏キリシタンと分断し、区別する名称を初めて知りましたので、興味を持って読むことが出来ました。

著者は生月島に「隠れキリシタン」として残る人々や残存する遺跡(?)のような場所を訪ね、また生月島の博物館学芸員中園成生氏から取材して、生月島の隠れキリシタンの信仰の姿を伝えてくれました。要するに、ユネスコに登録されたキリシタン関連遺産は、明治初期にカトリックに戻ったキリシタンのものであり、生月島のキリシタンはカトリックに戻ろうとしなかったため、除外され、彼らの信仰はキリシタンとしては登録されず、「消された」ということになるということです。私はキリシタンの信仰がどのようなもので、なぜ迫害を耐えて生き残ったかということに強い関心がありました。読んでみて、生月島のキリシタンの信仰は、現代の私たちの理解からすれば、キリスト教とは言い難いものを感じざるを得ないという実感がありました。

ちょうどタイミングよく、國學院大學博物館「世界文化遺産登録記念 キリシタン 日本とキリスト教の469年」の展示と講演のチラシをお嫁ちゃんからもらいました。講演者は中園氏で、タイトルは「生月島のかくれキリシタン」でしたので、すぐに申し込みをしました。27日(土)の午前中に夫を見舞い、午後出かけました。非常に興味深い講演で、<消された信仰>のなかでも述べられていた事例を、歴史的、科学的な見地から、述べられ、多くを教えられました。

今は消滅の危機にある生月島のキリシタンの信仰の**教義**については、説明できる人はいない。残存している「祈りの言葉」は意味不明とされる言葉もあるが、400年にわたり、教義を教える司祭が不在のため、先祖の口伝にのみ忠実に従ってきた。17世紀のイベリア半島のグレゴリオ聖歌やラテン語と推定される。「おらしょ」は現在のカトリックの使徒信条と内容は全く同じである。祈ることこそが天と地を繋ぐ証しであった。彼らの信仰の背景には、当地の最初の殉教者・西玄可の姿にキリストの受難が結びつく、インパクトの強いものがあつた。

また、禁教により秘匿する必要があつたため、禁制後に幕府によって導入された寺請制度、神社などの村落ごとの氏神の普及に対応すべく、また、古来の年中行事や農耕の暦に恭順すべく、キリシタンの**儀礼**は他宗教と並存して行つた。儀礼を守ることが信徒のすべき勤めであつた。だから、教会暦に応じた儀礼も装いを変えて実行されて来た。これはカトリック信徒の視点からは「混成宗教、土俗的なものを有する、変容、はなれ」等と評価されてきた。

結論から言うならば、教義を担当すべき神父不在の中で、17世紀のイベリア半島のキリスト教と、その土俗的、呪術的側面も持ち合わせつつ温存させ、先祖への敬愛、日本の宗教、社会にも影響を受けて、「かくれキリシタン」となつたのが、生月島の信仰であるということです。

教会も、聖書理解が深まると共に、また、時代と共に、信仰が変化、変遷してきました。そういう意味で「生月島のかくれキリシタン」は今回の世界遺産の中から消されていいのでしょうか。小さい弱い個が、大きい強いものに飲み込まれて、存在しないかのようになってはなりません。